

## 日本語と中国語の間

### － 楊逸、李琴峰、横山悠太による「日本語文学」のバイリンガル性－

ザベレジナヤオリガ  
Zaberezhnaia Olga

この2年間『21世紀の日本』という著書（来年発行の予定）の序章と第6章「日本らしさの発見－現代文学における時代の主役たち」に取り組み、文学作品における自己認識、言語的アイデンティティ、多言語社会の日本といった問題に興味を持ち、その引き続きとして現代文学における言語とアイデンティティを探り始めたのが今回のテーマに至ったいきさつである。

現在「バイリンガル」・「マルティリンガル」以外に「複言語的」・「ヘテロリンガル」など、単一言語に対する概念が強力的になり、日本語以外の様々な言語背景を持った作家が日本語で執筆している。作家が日本語が母語でなくてもよいという多文化の影響が投影されている「日本語文学」が注意を引く。

本発表では特に日本語と中国語のバイリンガル作品に注目する。漢字が中国から伝来した日本語には既存の日中バイリンガル性が認められている。それを踏まえて現代中国語の要素が何らかの形で取り入れた日本語文学の三作を分析する。

横山悠太『吾輩ハ猫ニナル』では中国語の単語が多数使われ、それにひらがな・カタカナ・中国語発音のルビがつきことば遊びとパロディーを目指した、異言語との衝突が視覚的に強調されたバイリンガルな環境が作られる。

楊逸『ワンちゃん』では中国語風な発言、地方の日本語・中国語由来の独自の表現によってバイリンガルな環境が成されている。

李琴峰『彼岸花が咲く島』では中国語と日本語が混ざった言語と、漢語が完全に排除された「ひのものとことば」という人工言語によって言語とイデオロギー・社会・ジェンダーとの関係が問われ中国語と日本語の相互関係および日本語の複言語的性格が明らかにされている。

このような文学は日本と中国の交差点にあり独立とした「日本文化」・「中国文化」の概念を疑い言葉が共存するという複言語的な環境を成り立たせる言える。

## 日本語と中国語の間

### － 楊逸、李琴峰、横山悠太による「日本語文学」のバイリンガル性－

天理大学 ザベレジナヤオリガ  
Zaberezhnaia Olga

#### 一、日本語文学について

作者が日本語が母語ではなくてもいいという「日本語文学」は長い歴史を持つが、その概念自体はポストコロニアルのものであり、実際に文壇に認められたのは李恢成が1972年に芥川賞を受賞した時であると言える。郭南燕(2013)の定義によると日本語文学とは書き手が日本人、日本語が母語でなくてもよいこと、日本語で書くことにはあらゆる選択肢があったこと、外からの視点で日本語と日本文化を観察し解釈していること、独自の日本語運用法があること、多言語・多文化の影響が投影されていることなどの条件が指摘されている。

現在はアメリカ出身のリービ英雄、アーサー・ビナード、台湾出身の李琴峰と温又柔、ドイツ在住の多和田葉子、アメリカ在住の水村美苗をはじめ、複言語的な背景を持つ多数の作家が日本語を創作言語として選び活躍している。その作品に研究者の関心が向いたのは最近のことであるが現在日本語文学は様々なアプローチから取り扱われている。

本稿では特に中国関連の作家に焦点を当て、日本語と中国語の影響を受けた表現を使った作品を分析し、そのバイリンガル性による特徴を明らかにしたい。周知のとおり、日本語は中国語と密接な関係にあり、漢文が文章語として古くから使われ、漢字や漢字文化も中国から導入されてきた。日本語は中国語の要素を吸収し現代日本語は漢字や漢語なしでは考えられないものである。このような日本語の元来(漢字登場以来)の「ハイブリッド性」は多くの研究者に指摘されてきたがハイブリッド性に加えて日本語は「中国との出会依頼、戦略的融合・妥協・同化のプロセスによる絶えない、飽きることのない翻訳作業」として定義されている(YIU 2020)。このように日本語と中国語の間の翻訳作業は日本語の不可欠なプロセスであると言える。

しかし、口語はどうであろうか。漢文が使われていたが近代文学でも話し言葉としての中国語の影響が一切なかった。学習を受けなかった日本人は中国語会話が理解できない。そのことは現代日本語作家が少しずつ変えようとし日本と中国の間に言語の橋を架けているとも言える。

日本語作家が外部から日本語を観察でき意識的に、あるいは無意識にもう一言語(もしくは複数の言語)への翻訳作業を作品に取り入れているのは多くの研究者に指摘されてきた。そしてここで取り扱う作家は「絶えない翻訳作業」を意識し意図的に作品にその用法を取り入れているのである。そのバイリンガル性を生かした現代日本語文学の新しい在り方や可能性を探る。

#### 二、横山悠太の言葉遊びによるバイリンガル性

横山悠太(中国語話者)の夏目漱石のパロディー『吾輩ハ猫ニナル』では中国と日本の間

に存在する青年、磯田カケルの心理が描かれている。中国人の母と中国に住みビザ関係の手続きで日本に行くことになるという内容であるが、この作品はあらずじより言葉遊びに集中している。カケルは学校で日本語を学び、日本人の父と過ごした時間をよく思い出し、アニメ好きの友達がいるなど、日本語と日本文化と接触する機会が多い。

この小説は「日本語を学ぶ中国人を読者に想定した小説」として意図的に工夫して作られたものと紹介される。従って主人公のバイリンガル性は次のように表現される。

#### 1) 漢字とルビの活用

「爸<sup>とう</sup>さん」、「覚<sup>かん</sup>じる」、「拉<sup>ラーメン</sup>麵」、「各種各様<sup>きんまぎさま</sup>」のように中国語での表記に日本語のふりがながついている。あるいは「汉语<sup>チャイニーズ</sup>」や「日語」のように中国語の単語（汉语、日语）を半分中国語半分日本語にしルビは外来語にされている。

#### 2) 慣用句の使用

「自分はそれを眼にしたとき、酢を飲むような嫉妬を覚えた」のように中国語の慣用句（酢を飲む＝嫉妬する）を日本語の文章に取り入れる。あるいは「脾氣<sup>ひき</sup>が合う（＝性格が合う）」のように日本語の慣用句を中国のと合わせる。

#### 3) 漢字による解釈と表現

友達の朴<sup>ピョスアナン</sup>沢男がアニメのファンあり、彼は朴<sup>ピョヂヤナン</sup>宅男と周りに名付けられていたことで明らかに「オタク」の意味が伝わる。加えて、カケルの女らしい知り合いの一人の描写ではわざと「やつ」を「她<sup>やつ</sup>」として中国語の「彼女」という意味を含む。このような漢字とふりがなの合わせは女性的男性の雰囲気伝える。

カケルは日本語の漢字仮名交じり文が「けったい」であると言っているが、日本語は彼の中に丈夫な根をおろしている。横山はあらゆる言葉遊びによって主人公のバイリンガルな世界を詳細に表している。現代中国語、日本語の和語・漢語・外来語の合わせは彼の頭の中で混ざっている。このように中国と日本の間に迷う主人公の心境、二重のアイデンティティを持つ一人の像がいきいきと成り立つ。

### 三、楊逸における発言のバイリンガル性

『ワンちゃん』は楊逸（中国出身）の初作であり、日本語が「未熟」あるいは「粗雑」であると批判されながら芥川賞の候補となった。芥川賞を実際に受賞した小説『時が滲む朝』における独自の中国由来の表現などというハイブリッド的要素はすでに谷口幸代氏（郭南燕 2013 参照）によって分析されている。加えて『時が滲む朝』は中国と中国人をテーマにしているが『ワンちゃん』ではバイリンガルな主人公と日中間の往来が描かれるため本稿では『ワンちゃん』に集中したい。

『吾輩ハ猫ニナル』と同様に日本と中国の間に取りかかった中国人の主人公「ワンちゃん」（木村さん）の人生をめぐる小説である。ワンちゃんの中には中国の過去（結婚生活と離婚）、日本の現在（日本に逃げて結婚した夫と姑の世話、）そして中国の現在（成長した息子、中国人女性と日本人男性の「国際結婚の仲介人」としての仕事）が交じり合い存在している。

登場人物は様々なことばを使う。日本人のほとんどは四国のなまりで話しワンちゃんが話している日本語も「ここは田舎、サービス悪い、しょうがないね」であるように意図的に未熟なものにされている。ここで特に注目を引くのは、中国人の発言である。中国の地方でワンちゃんの手伝いをする秋姉は田舎のことばを使うそうだが、それを表す日本語には例えば次のような文がある。

「この子はね、去年女の子を出産して姑に追い出されちゃってさ、半年前に離婚させられちゃったんだ。可哀相に、ずっと落ち込んでて、お母さんも参っちゃってさ、何とかして欲しいと、頼んできて、可哀相に…」

以上は秋姉が中国の女性を見合いで紹介することばである。「聞く」レベルでは話し言葉として「出産」が不自然である。加えて人の姑は他人の前で「お姑」と呼ぶのが一般的であるが、ここでは「お」が欠けている。「読む」段階でも漢字表記の「可哀相に」と「して欲しい」が日本人が話す日本語とは異なる印象を与える。このような中国語の影響がみられる文は実際に読者にとって中国で中国語を話す女性のイメージを作ること成功していると言える。そしてそれはワンちゃんの日本語と違って作家が無意識に取り入れた方法であると推測できる。

このように楊逸は横山のルビや言葉遊びと異なり意図的・あるいは意図的でない登場人物の発言的描写によってバイリンガルの環境を成している。

#### 四、李琴峰の言語的ディストビー

李琴峰（台湾出身）の『彼岸花が咲く島』では言語が主なテーマといえる。「ニライカナイ」（日本）から追い出された主人公の少女が「島」に漂いついた。女性が支配している「島」に昔日本と台湾から逃げた人々が合流し住むようになった。島の人は日本語と中国語が混ざった「日本語」を話し、その指導者の「ノロ」は「女語」（現代日本語）ということばを使う権利がある。そして主人公の「宇美」が生まれたニライカナイでは漢字をすべて削除した「ひのものとのことば」が使われている。宇美は友達になったヨナと一緒に島の歴史を知っていく。一般の人が使う「日本語」と漢字のない「ひのものとのことば」は異言語や異文化への嫌悪から生まれたものとして否定的に描写されているが、女語（日本語）は一番地位の高いことばであり、女語ができる大ノロも正義正しい人物として描かれている。言語が自然に交流しなければならなくだれもが切り裂いたり、自分の所有物ににしたり、不可欠な部分を取り除いたりすることができないと作家が言いたいのである。このように李琴峰は文章に中国語の要素を日本語に導入しないのだが、日本語の元来のバイリンガル性（あるいは複言語的性格）や言語間の交流の必要性を出張する。

#### 終わりに

以上の主人公は中国語と日本語の間に存在しているのが共通点である。日本語文学は作家の複言語的な背景からアイデンティティの問題を扱うものが多く自分自身の体験を書く

作家は少なくない。以上の作品も作家自身の体験に基づいているが主人公は作家が外から観覧する別の人である。

作家は主人公とそのバイリンガル性に対して異なるアプローチをとる。横山悠太は直接漢字とルビの接着・慣用句の取り付けによって翻訳に近い方法を使い、作品が「絶えない翻訳作業」そのものであると言える。それに対して楊逸は日本語に中国語の要素を融合させようとしている。李琴峰は人工的な言語なディストピーを描いている。いずれの方法も中国語と日本語の共通歴史による日本語のハイブリッド性が可能にしたものである。それは日本語を多様化し新しい表現が生まれ日本語文学の発展とともに中国語の影響が現代日本文学にとって昔とは異なる形での表現力につながるであろう。

### 対象作品

李琴峰(2024)『彼岸花が咲く島』文藝春秋

楊逸 (2008)『ワンちゃん』文藝春秋

横山悠太 (2014)『吾輩ハ猫二ナル』講談社

### 参考文献

郭南燕 (編) (2013)『バイリンガルな日本語文学：多言語多文化のあいだ』．三元社、  
Kleeman, Faye Yuan (2018). Intertwining Tongues : Bilingualism and Hybrid Texts in Contemporary Japanese Literature: From I am a Cat to I Become a Cat. *The Journal of Japanese-Language Literature Studies* 6 (1):21-31.

Yiu, Angela (2020). Literature in Japanese (Nihongo bungaku): An Examination of the New Literary Topography by Plurilingual Writers from the 1990s. *Japanese Language and Literature*, Vol. 54 (1). Pp .37-66.

Ed. by Rachael Hutchinson and Leith Morton (2016). *Handbook of Modern Japanese Literature*. Routledge.